

[教育学習支援センター活動報告 1]

ラーニングアシスタント・ライティングサポート

1.はじめに

教育学習支援センターでは、グループ学習などでの議論を活性化させるため、ファシリテーション業務を中心とした授業の活性化等を目的とする、ラーニング・アシスタント（以下LA）とライティング・サポートの運用を2015年度より実施した。

LAについては、募集内容（講義運営に専任教員がコミットしている事など）を検討し、運営委員を通じて各学部等へLA活用授業の募集を行った。その後、対象授業の選考を行い、LA候補者に対し、LAの業務内容、ファシリテーションの仕方などに関する2回の事前研修会を実施した。2015年度後期授業を対象として、授業数12クラス、のべ165.5時間のLA活用授業を提供した。

ライティング・サポートとしては、ラーニング・コモンズ内にライティング・サポートコーナーを設置し、経済学部学生を対象として、のべ325時間のライティング・サポートを実施した。ライティング・サポートの実施にあたっては、実施学部である経済学部との打ち合わせ（対象講義、サポートの回数、対象者、サポータの推薦など）を行った上で担当学生を決め、文学部との打ち合わせ（研修プログラムの内容、サポータとして協力する院生の紹介等）を経てそれら学生への研修を実施した。

2.成果

LAを投入することで、より受講生の学習を活性化できたものと考えられる。特にグループワークの際の学生へのアドバイスは、議論を深めるうえで有効であった。例えば、マネジメント創造学部での「基礎リテラシー¹」の授業では、1年生が頻繁にLAである4年生に質問を投げかけたり、経験談を聞いたりするなどの姿が見られた。4年生のLAは、授業終了後に次週の授業の際、どのようにファシリテーションを行うかの相談を行い、アドバイスの効果的な仕方を自主的に考えていた。1年生への学習支援だけでなく、LA自身の学びにもつながっているものと考えられる。

ライティング・サポートについては、レポート添削指導を行うことで、文章作成の基本的な間違いを減らし、学生自身の気づきにつながったと考えられる。

ただし、これらはいくまでも主観的に把握した成果であり、客観的な学習効果の検証については今後の検討事項である。

¹ この授業は1年生約200名の必修科目で、約50名を4クラスに分け、1クラス2名の教員が担当し週1回2コマ連続で行われる。クラスでは、50名を10グループ程度に分け、グループワークを中心としたアクティブ・ラーニング型授業をおこなっている



図 1.LA によるファシリテーションの様子 (左：岡本、右：CUBE)



図 2. ライティング・サポートの様子

3.課題

実際に LA とライティング・サポートを実施したところ、次のような課題が明らかになった。

LA に関しては、1)LA 候補者の確保が困難、2)LA の活用方法、効果が不明確のため教員が LA 活用に手を上げにくい、3)教員と LA 間の意思疎通・情報共有が不明確、の 3 点が課題である。

2015 年度の場合、LA 候補者については、これまで当該授業を受講した学生の中から、担当教員が LA に相応しい学生を推薦する、という形をとった。しかし、推薦にあたって学生に連絡するにも連絡手段が乏しく、何名かに声をかけても断られる場合もあるなど、LA 候補者確保にあたっての教職員の労力が大きい。

また、LA 活用授業の経験やノウハウが蓄積されていないため、授業でどのように LA を使えば良いのか分からず、教員が LA の利用を躊躇しているとの話もある。

LA は毎授業後「LA 報告書」を教育学習支援センターに提出する。それら報告書の多く

から把握できる事実として、担当教員から LA に向けての具体的業務内容の指示や説明が無いため、LA 自身が困惑している授業が少なからず見受けられる。

4.提案

2015 年度に実施した活動を踏まえ、今後、LA とライティング・サポートをより効果的に実施するための具体的施策を提案する。先に述べた課題を解決するために、1) LA プール制の導入、2) LA 活用モデル授業の実施とノウハウの共有化、3) 教員・LA 間の情報共有の強化、の 3 点を提案する。

まず、LA プール制であるが、教育学習支援センターが LA 候補者を募り、ファシリテーション研修の実施後、LA を活用したい授業に LA 候補者を推薦する。担当教員の授業は受講していないが、一般的なグループワークの支援や学生への助言ができる LA を一定数確保する。

一方、授業内容の伝達に深くかかわる場合は、教員が過去の受講生から LA を確保する方法をとる。LA プール制とこの方法の 2 パターンを用意することで、教員側の負担の軽減が見込まれる。

教育学習効果の定量的評価については、LA 活用授業について、学習者に対する事前、事後の学習評価の実施、LA 活用授業と非活用授業との比較、などを行うべきである。ただし、効果測定に関しては専門的観点からアンケート内容等を吟味する必要がある。

教員と LA との意思疎通については、LA 報告書を PDF 化したのち、OneDrive 等の共有フォルダに置き、毎授業後に教員に連絡することで、教員への迅速なフィードバックが期待できる。

[教育学習支援センター活動報告 2]

スマートデバイスを活用した学習支援環境の構築

1.はじめに

学生個人のスマートフォンやタブレットなどのスマートデバイスを学びのツールにする教育版 BYOD として、MODAC を構築した(図 1)。MODAC は、スマートフォンにキーボード、マウス、モニターを接続し、パソコンと同様に文字入力ができ、スマートデバイスの画面をモニターへ投影できる。それにより、スマートフォン版 Word、PowerPoint アプリ、あるいは Web ブラウザなどを利用することによるレポート作成や情報検索などを行うことができる。さらに、OneDrive や Evernote などのクラウドサービスと連携することにより、自宅パソコンなどで作成したファイルをスマートデバイスなどで編集することができる。現在、MODAC は、5 号館ラーニング・コモンズ、西宮キャンパスに設置している。今後、学内に合計 30 セットを設置予定である。

また、学生の持つスマートフォン等に LINE のようなグループを作成し、グループごとの連絡やファイル共有、クリッカー機能が使える「MOVARI」を構築した(図 2)。MOVARI については、一部授業で試行的に利用している。

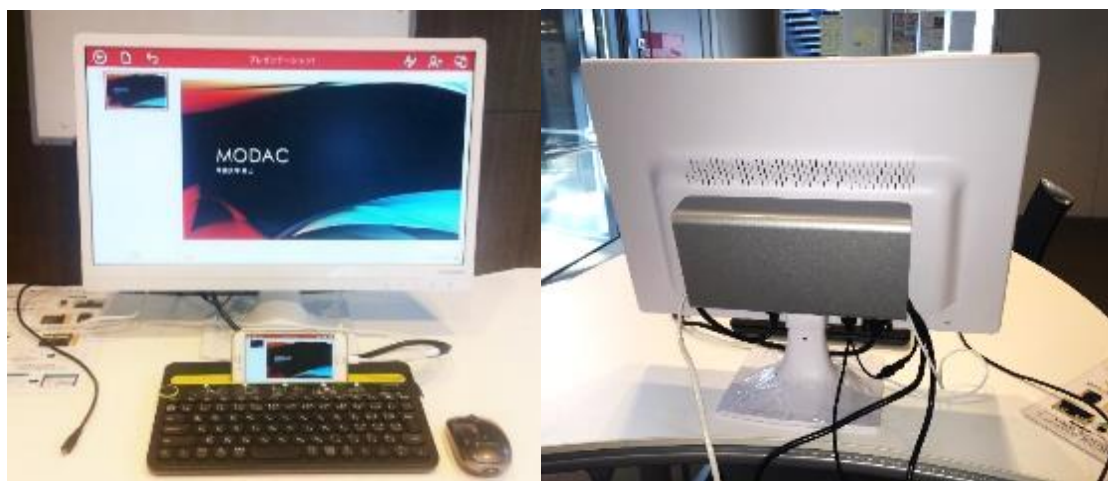


図 1.MODAC 外観



図 2.MOVARI

2.成果

BYOD 環境をラーニング・コモンズや一部授業で活用し、パソコンに代わる新たな情報環境を実現した。例えば、ラーニング・コモンズでは、パソコンの代わりにスマートフォンと MODAC を使いながら友人達と課題の相談を行っている様子が見られた(図 3)。マネジメント創造学部では、1 年生の「基礎リテラシー」の一部クラスに MODAC を投入したところ、スマートフォンの Web ブラウザで情報検索を行い、その結果を見ながらグループワークを行っていた(図 4)。以上のように、自学自習だけでなく授業での活用も行えることが分かった。特にグループワークの際、画面を見ながらメンバーと議論することに適しており、学生が常に携帯しているスマートフォンを、協同学習を促進するツールにする環境が実現できた。



図 3.ラーニング・コモンズで MODAC を利用している様子(岡本キャンパス)



図 4.マネジメント創造学部で MODAC を利用している様子(西宮キャンパス)

3.課題

現在のところ、MODAC の利用頻度は高くない。学生数名に聞いたところ、「どのように使えばよいのか分からない」「そもそもスマホでワープロやプレゼン資料を作れることを知らなかった」「キーボード入力よりフリック入力の方が使いやすい」などの意見が得られ、初めて見る機器に戸惑っている様子が分かる。また、教職員に対する利用案内なども周知されていない。

MOVARI は現在開発途中であり、一部授業での試行にとどまっている。

4.提案

MODAC に関しては、まずは教員、学生向けの利用案内の作成や告知を行わなければならない。また、MODAC を最大限に活用するには、スマートフォンとパソコンの連携が必須である。そのためには、本学学生は誰でも無料でクラウドサービスの OneDrive が利用できるということを周知徹底させ、パソコンとスマートフォンでファイルの共有ができることを学内に広くアナウンスする必要がある。

MOVARI については、利用を希望する授業を募り、実際に授業で利用してもらうことで利用者を増やす予定である。